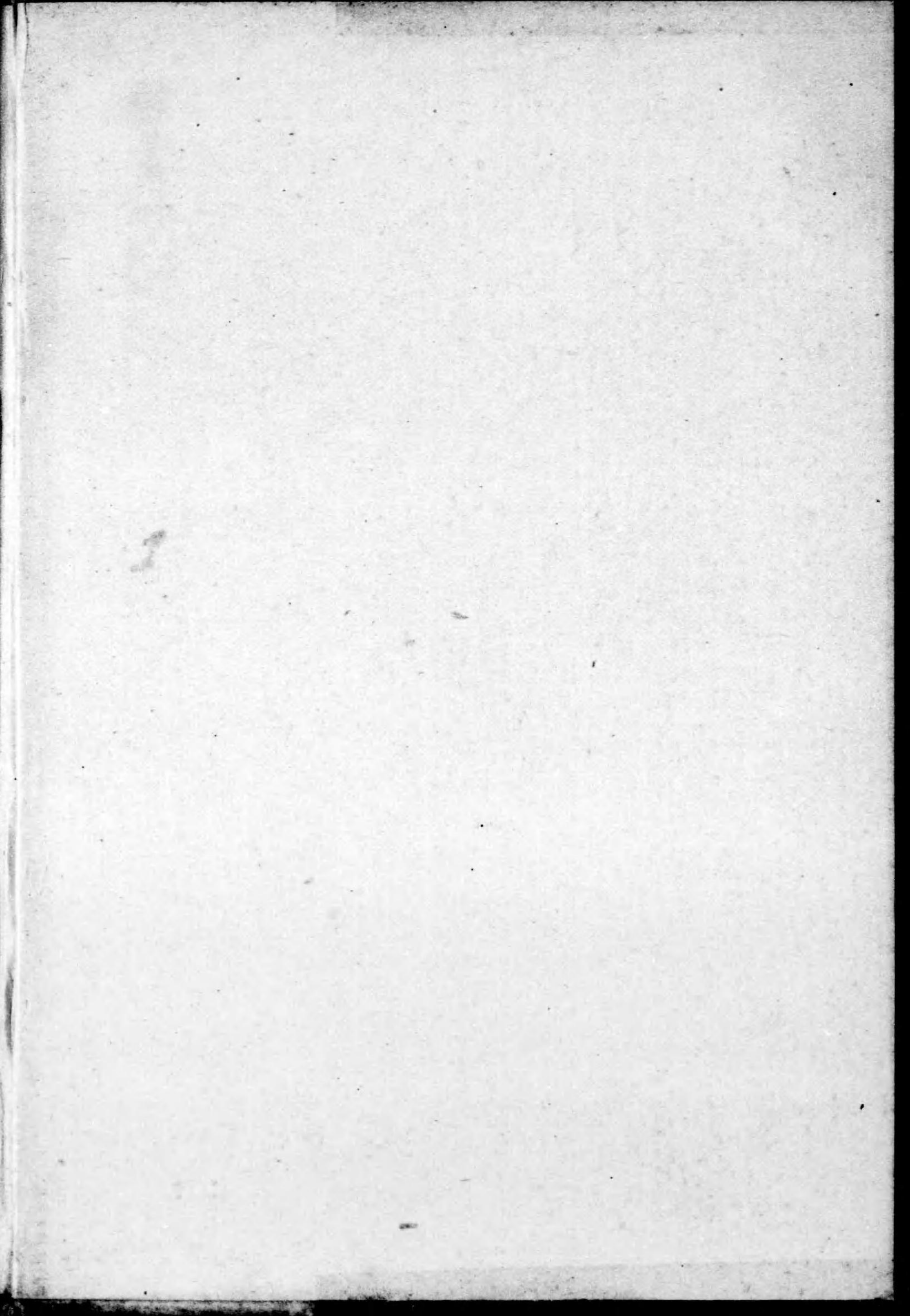
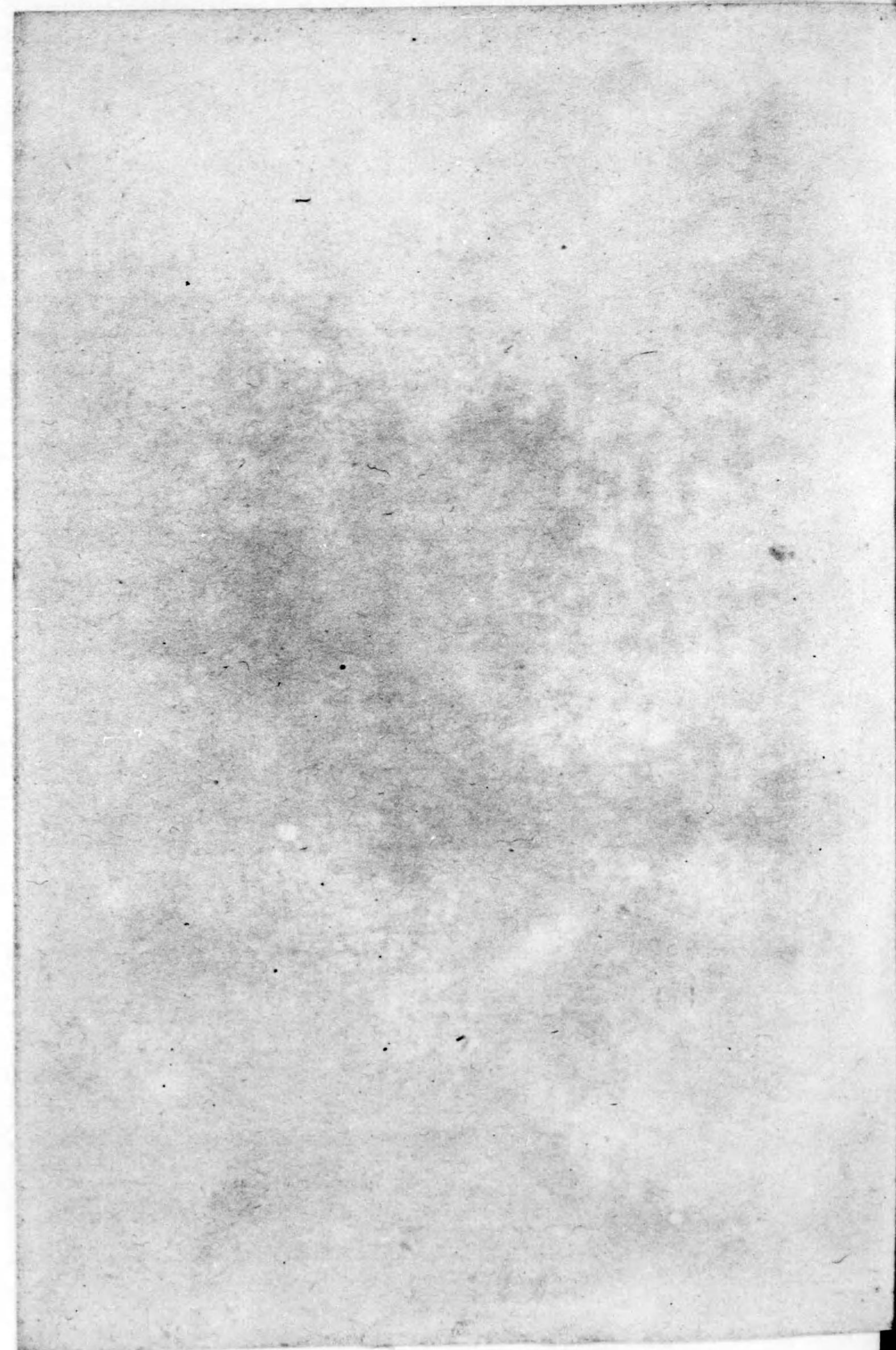


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

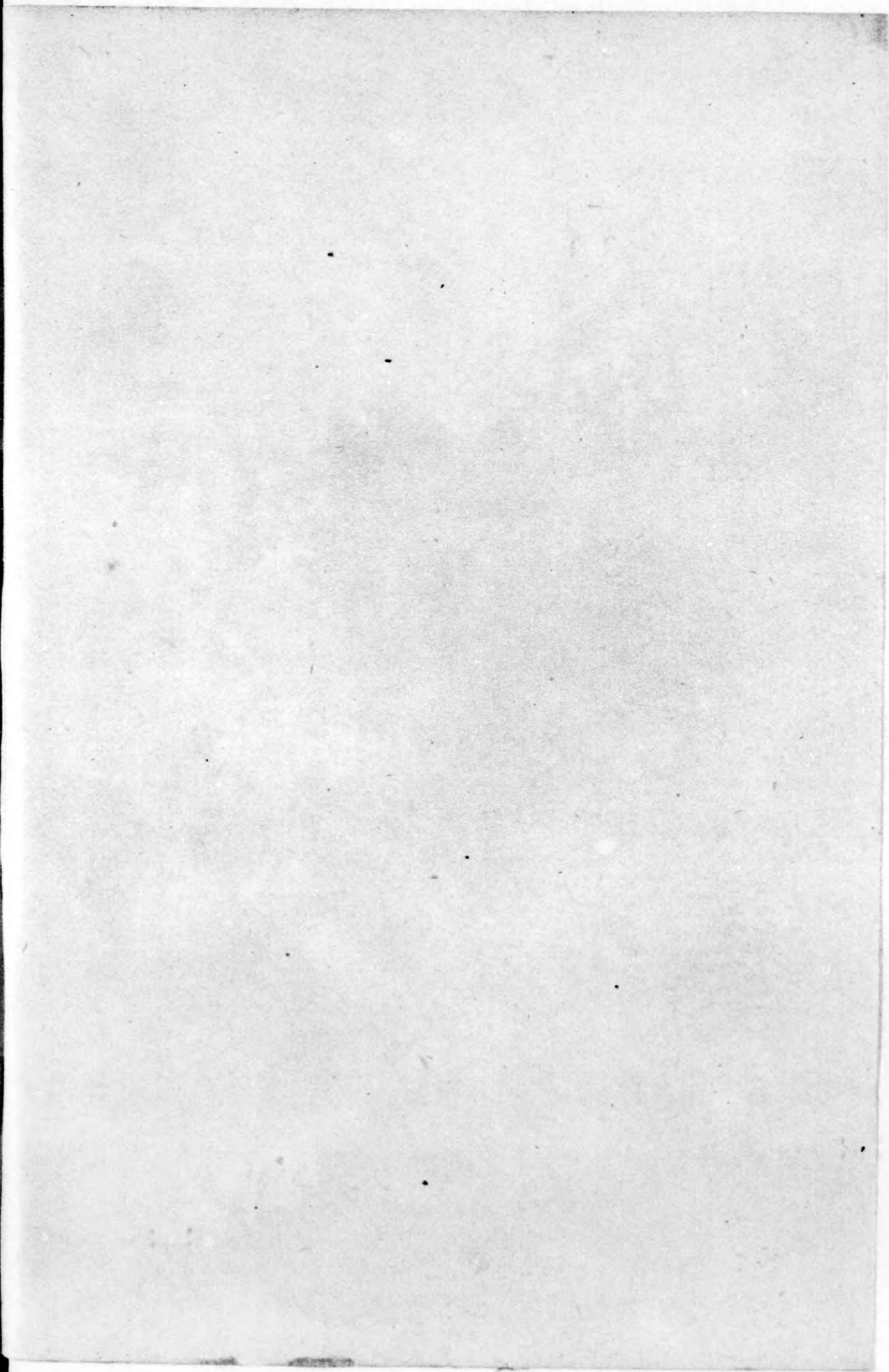
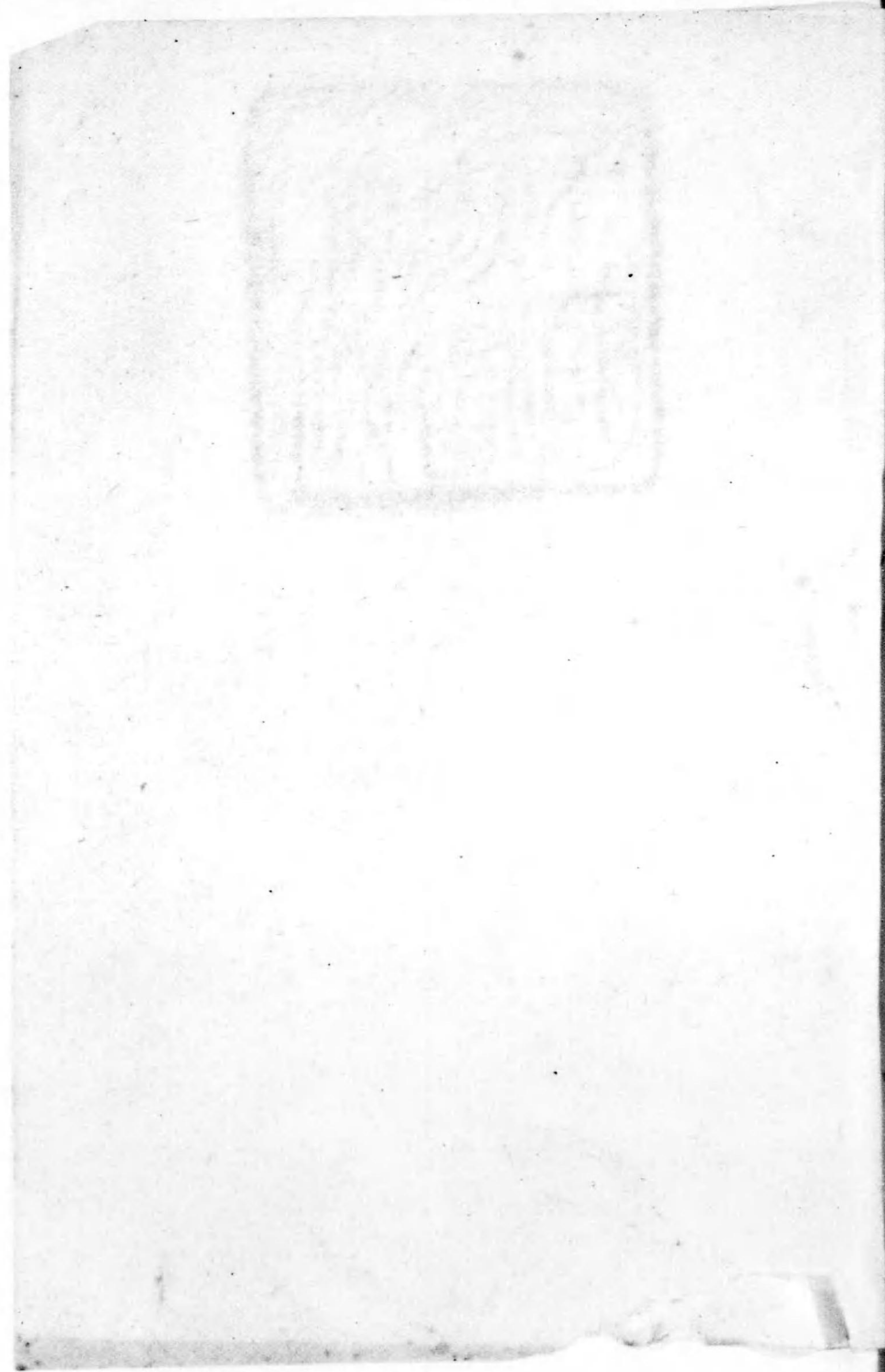
始











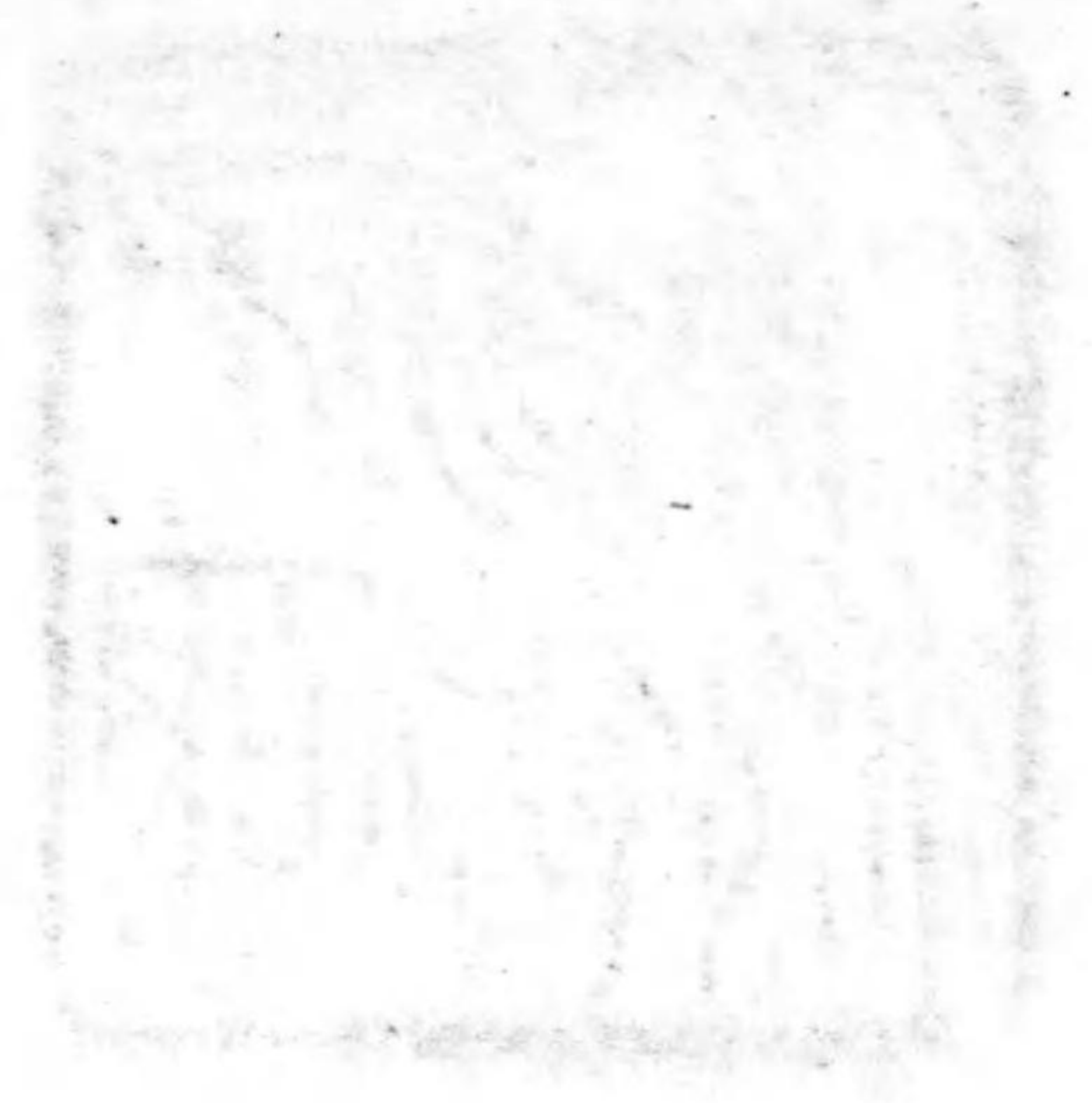




實

磯ヶ谷紫

正 沐  
8. 5. 28  
交 内





特101  
445





句集「女の巻」「浅草の巻」の著者復新らたに一巻を編みて「草の實」と云ふ、即ち曩の二巻に載せがたきもの及其後の句稿中より偏するところなく撰ばれし由なれば例令ば摘み採りし籠中に草の實の色とりづくに人の嗜好に應ずるならん乎。

草の實や誰がかざしても珠照らん

大正八年五月

静 更



つまらないと思つても、それかの中には何かの思ひ出の種ともならう。そんなつもりで、こんなものを編むことにした。明治二十九年秋より明治三十九年まで即ち小學時代から中學時代までの十年間のものはすべてこれを除外し、明治四十年より大正八年の春まで最近十二年間に歌へるもののうちより約六百句を自ら撰んだものである。この間少なからざる歳月を費したきは云へ自分にはどれだけの満足を得たかも解らない。なほ此後もこれで自分は充分に満足をしてゐるものである。

大正八年五月十五日午後七時

紫江



目次  
夢 句 三  
珊瑚のふ 三  
夢の指の 六  
夜の街の 九  
幕の登音 二

三 九 六 三 三



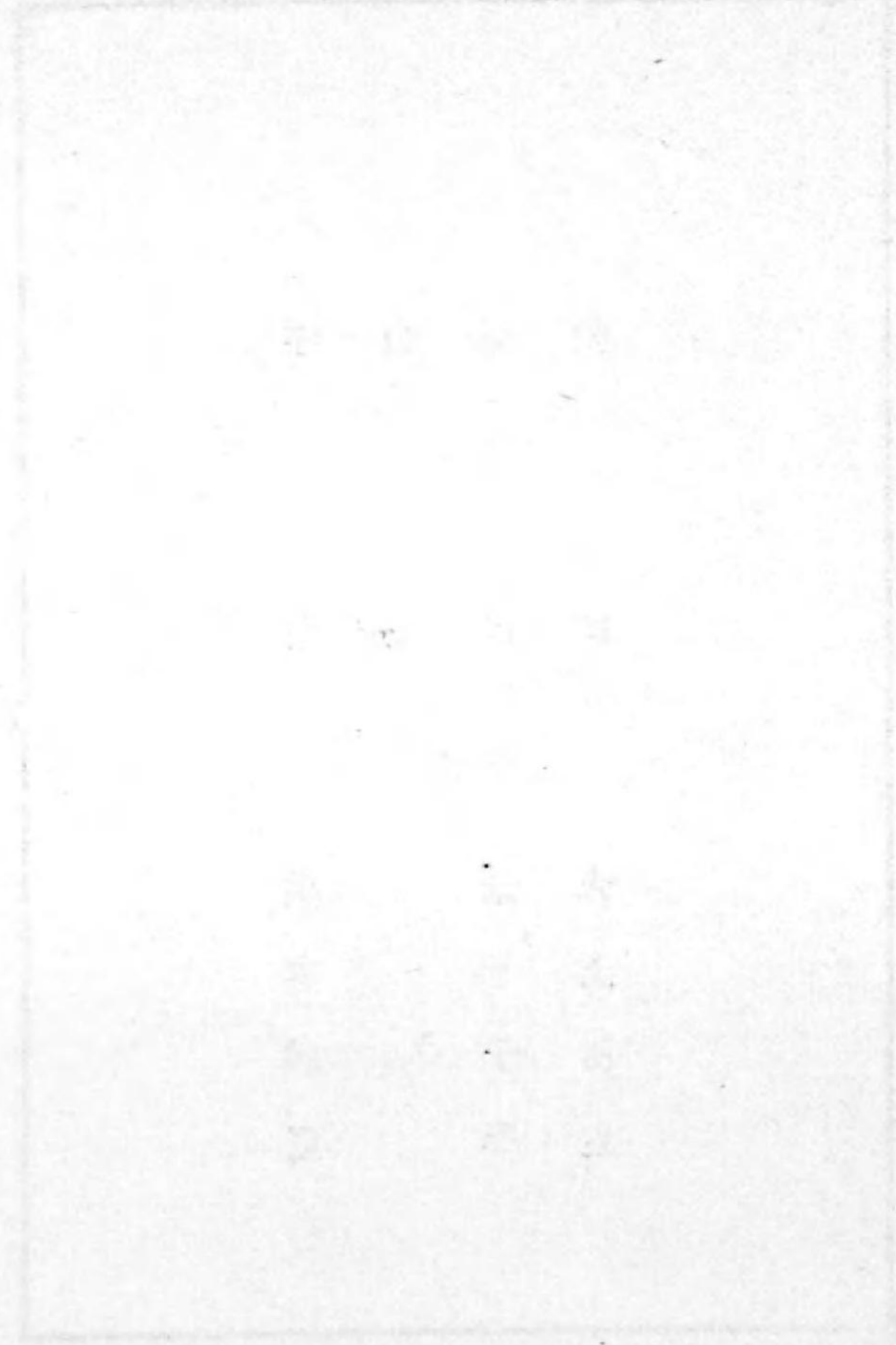
裝 扉 自 序

幀 畫 序 文

水	金	橋
上	子	本
傳	千	靜
近	春	更



草  
の  
實





夢  
句  
と  
樹



立春や物足らぬ憂き貌をして  
立春や乾き切つたる石の埃  
立春やペンもてば耽ける空想  
立春や劇場の場面の景に  
春淺しきぬぎぬの夢のはらわた  
春寒や左りの肩の塗り薬



春寒やドン底の悲しみの唄  
春寒や死の假面を謳はれて  
唇紅でにぢむ夜の唄春寒し  
春の日や赤い感じの鈍ぶる午後  
春の日や飽きて見るもの樹の影に  
春の日は美音につれて流れゆく

うとい日は眼睭が重い春日かな  
春の夜や夢を祭りて匂ふ樹に  
春の夜の生涯は三味の音に似る  
春の夜の赤い音青い音かな  
春の夜の寄席の蒲團の匂ひかな  
おぼろ夜や逢引に打ち拂ふ石



おぼろ夜の素足もよろし杉の下駄  
おぼろ夜や法華經を内懐に  
おぼろ夜や見送られつつゆく街の角  
長閑さや日光の調子に似たる  
暖かやいろいろにうつる音調  
惚れられそうな顔してゐたり春永に

遅き日や冷えし茶碗の湯を捨てて  
遅き日やあくまで夢と幻と  
何事も秘めてうらみを遅ひかな  
貌見ればふところ鏡遅ひかな  
云ふて見て既にあやしむ日もおそき  
行春の潮満つる頃むらさきに



春の別れあこがれの國の森林  
夏近や駿河台まで一息に  
春の月泣かされし海岸の街かな  
春の月仲の町からふいと出る  
東風吹くや薄寒き窓を開きて  
東風吹くや旅路ののぼり街の青空

春の風淋しい女よ太陽に背く  
春風やどこで纏れて水の上  
春雨や蛇の目の傘の骨ひかる  
春雨や河岸の石垣倉の文字  
春雨や黒塗の馬車の定紋  
春雨や樹木に結ぶ小屋の繩



春の雨この稿の續きゆく日を  
訪ふは誰れ格子の音と春雨と  
顔みれば顔もかくしぬ春の雨  
赤ければ赤きほどよし春の雨  
春雨やにはひうすれて濡れ色に  
淡雪や窓の硝子に紙を貼る

春雪や船ですれたる三味と酒  
春の雪雑木林を抜け裏に  
淡雪やかくす小指も襦子の襟  
淡雪に謳はれて死ぬ戀もよし  
貝寄や海風の耳をうつとき  
貝寄せて南から戀をもたらす



初雷や情死咄し打ち絶えて  
春雷に鋭るとくおぢず生命いのちはむなし  
初雷や淋びしげに見る貌と貌  
初雷やいと淡き戀の冷笑  
陽炎やあさぎの幕の反映に  
はづかしい男ともなれ陽炎へり

陽炎やあまねくみちわたるくちづけ  
陽炎やわかひざもとをめぐる日に  
霞む日や覺めよ覺めよと君歌ふ  
夕霞頻りに祈禱する日かな  
霞む日や落着きし音色を選ぶ  
霞む野や埋木の箱をあけたる



さきの世の畢らぬまへの霞かな  
故郷<sup>さ</sup>を去りて笑ふも泣くも舟霞む  
霞む日の背縫ひの絲をぬくかな  
淋びしさに獨り寝ねけり音霞む  
よりどころなき<sup>いのち</sup>生命を捨てん霞かな  
うつくしい夜に解けてゆく氷、胸と胸

春水や日ぐれてみつる胸の潮  
春水や荒野につづく低い沼  
春水や根つぎて崖のすべり松  
春の水軽きもの呼びてあつめし  
春水やこぼれし米の濁るまま  
春水の鏡影に砂が流かるる



春水やうたがひは互の胸に  
春の水紙入れの折目の縫ひに  
山笑ふ南の森は日の影に  
春の潮その日うれしく帯解きて  
春潮や執着のするどき響  
春潮や君によく似る貝の蓋

春潮や地平線の歎きをききぬ  
春潮の悪魔は波の千尋かな  
春潮や船の底海の底かな  
春潮や風の音貝の音かな  
春潮や鬱憂の動機の發作  
誰の名よ春の泉の底に湧く



罪科をゆるされて淋びし春の路  
生涯の一步ゆづらん春の路  
出代りや故郷の橋をふむ音  
雁風呂や果なき夢の君偲ふ  
雁風呂や氣分のみちる海の底  
四月馬鹿聖者の戀と智と夢と

紙雛を抱くある夜のおもざし  
赤いものづくしがよろし雛の宴  
摘草やまたおどろきの眼をあげる  
軽い氣分抱いて見たる爐の名残  
人間は罪惡のかたまり野に遊ぶ  
そむけたる貌にもゆるおもひを桃の酒



支那街の奇しき楽器や釋奠  
戀猫に不思議なることもあるかな  
歸る雁歸らぬ君を呼びとめて  
憂ひ皆綺麗に去りぬ百千鳥  
囀りやうたかたの夢の咲く國  
囀りや淋しき樹木の蔭による

囀りや女可愼しく居に籠る  
鶯や南蠻の匂ひ薬を  
鶯やうすれつつ光るまぼろし  
鶯や南を向きて云ふ言葉  
乙鳥や河原の石を渡るとき  
乙鳥や濡れて破ぶる身のうらみ



乙鳥や海の楽譜の低い曲  
乙鳥や海岸の並木はなれて  
乙鳥や隠くせぬ針の曲りかな  
乙鳥や戀の洞に背をむける  
つばめ飛ふあさましき世の習ひかな  
燕やこころよくなかれゆく街

口笛はのどかに消えて雲雀なく  
駒鳥や春のにはひを夢に見て  
雉子啼くやうなされかちの夜つづきて  
出格子に月出る夜を蛙かな  
喉元をすぐれば忘れかちなり蛇穴が出る  
車へ野菜積んで蝶よ朝の別れよ



蝶となりてゆくらん君を挽歌うたひけり  
頬と頬ふれまいものを白魚鍋  
白魚や銀の寝櫛のくもる夜に  
春の鳥夕べの夢を告げに来る  
春の鳥泣き貌を隠くして出てゆく  
春鳥やかろく縫はるる夢追ふて

したはれて氣が氣ではなし草萌ゆる  
草萌や逆上目の目薬の瓶  
若草に眼を閉ぢ胸とち海の景色かな  
若草や深川の汀の家に  
若草や窺ひ寄れば消えてゆく  
若草や橋の小石を見おぼえて



若草や眞綿はうすく敷くものを  
梅の香や髪を撫でまはす癖  
朝の窓あけて障子に旭の梅よ  
梅咲きなばあの夜この夜の印象に  
白梅や自らを戒めて見る  
紅梅や絹づれつよくあたる肌

紅梅や薄紙に朝の貌かな  
紅梅や手握る第一の夢  
紅梅や長き夢長く覚えて  
梅佳節くまなく照る日わたづみに  
青柳や満潮の堀割の船  
青柳や道行の夜の背と背



青柳や青樓の時計のひびき  
その腕の見覚え枝垂柳かな  
青柳やうすく泪、情をうけて  
どのやうなことあらうともめをと柳かな  
戀の芽は銀座の柳めぐむ芽に  
青柳や冷えた唇で吸へおのこ

新人の髪のゆかりや青柳に  
若柳や戀の犠牲の流行唄  
青柳やなす儘にまかせたる指  
藝術に生くる貌なり花の幕  
花影や夢おしまるるまま生きて  
花の香や天地に怖ぢず呼吸をする



生の芽の萌え出づるみち夜の櫻  
こうなれば氣は強いものよ花櫻  
桃さくや細き枝細き道かな  
桃咲きて盃の底を見しかな  
愛情にこもるる花の林檎かな  
海棠や血の道の薬買つてやる

海棠や肌着の裏の赤い縞  
闇に逢ふ夜の嘆き蛇莓かな  
抱擁の冷えるひとみよ蛇いちご  
しなたるる膝に蛇葡萄莓かな  
夜を蛇の歩ゆむ莓の恐怖かな  
花莓咲くや誘はるる夢に眠りて



紅苺眞晝見る夢に疲かれて  
蛇苺すぎ毛がとんで草がるる  
蛇いちご醒めず夜に生く乳房かな  
誘はれつ汚れつ蛇いちごかな  
行僧の薊見て野の石にあり  
野薊や眼を閉ぢて見き地獄の圖

野の薊聞けかなしおのこの怒  
注射針折れてうつくし薊かな  
血は赤し乳は眞白し薊かな  
野薊や迷ふて咀の歌をきく  
野の莖悪性のそしりを捨てる  
白莖やバイブルと聖像と甕と



露の台唯立つてゐる空に瞳をすへて  
アネモネの花かほる胸飾りかな  
グロカスや服薬のあとの搏脈  
心中やダイヤくだけて春の砂  
春の星雲裂けてつかれし額に  
春の星モルヒネの苦痛に醒めし

春の色東京の夜の低い空  
春の影玉の緒閉づる響かな  
春の街わが瞳の領土ふみにじる  
世態よく情を捨てた春街へ  
春の街話はづして橋越えて  
三越を出る日本橋の晝春の市街



浅草は金で日か暮れ春の街  
貝釣や思はざる終の日來ぬ  
貝釣や近きより遠きにしかず  
貝釣や蛇の尾より玉をとる  
貝を釣る潮やこころの逍遙に  
春の銀座よ戀の鱗の赤き灯に

珊瑚の珠



初夏や筆先の軽い樂書  
涼しさに三角の家住み馴れぬ  
涼しさを敷石に小刀とぎぬ  
涼しさを袖をかさねて紫に  
涼しさを續け續けて逢夜かな  
涼しさをはかなき夢に似るかなし



涼しさに天賦の性よ肩上に  
涼しさを灯と灯と吸へば心持こころよい  
涼しさや肌がゆるめば眼が細い  
貌よせて涼しさ語る眼をとちて  
白きものすべて涼しや玻璃細工  
電燈をねぢれば涼し夜の息

短夜に珊瑚の珠も奪はれて  
明け易く愕然と醒めたる魂よ  
短夜を疲れたるまま生きなん  
みちか夜の袖にかくせぬ歎きかな  
明けやすく僅かの金に肌ふれぬ  
みちか夜や胸の扉をひらくとき



秋近や永代橋で夢消して  
夏空を見て動く瞳のやはらかさ  
夏空や浮島の樹蔭にねむる  
南風や紅き實のなる樹の影に  
青嵐悲しみを知る女と別れ  
青嵐淋しき唇と瞳と脈と

青嵐疑ぐりも石となる戀  
夕立や冷やかに天地さめたる  
夕立や迷ふにも折こそよけれ  
夕立や抱へて眠る霸王樹に  
夕立や蒼海の發現を知る  
夕立に非人情の逍遙よ



夕立や天地を叫へ官能に  
夕立や醒めては白し晝の夢  
夕立に潜熱のもえかへるかな  
鳴神や似て非なるもの石と麩包  
雷や消えなばこころ雲切れて  
雷や淫歌を捨てて亡ぶる日

雷や色紅き紐を結びし  
引潮や雷鳴に白き足跡  
明日の日の人魚の嘆きや雷す  
雷やくづれあふ髪のおののき  
明日は俺れどこで嘆くぞ雷に  
雷やしどけなき彼女の身の上



戀の花咲く水晶の影清水哉  
銀匙のすべるおののき眞清水に  
湧く清水みづからいただくがをゆるさじ  
五月雨や思ひも響く石と石  
五月雨や影の匂ひのなつかしき  
五月雨や絶えず絲聞く街にゐて

五月雨るるころを思へば悲しくて  
五月雨や馴染の朝の海の窓  
五月雨やともしびはかすかに消えて  
五月雨や夢ふところに入るその夜  
嘆くこともありて女よ五月雨  
衣かへかなはぬうらみ二度捨てて



衣替の夜の灯の裾におとすかなしみ  
衣更へてかるくなる土の匂ひかな  
衣更へていたづらの唇閉ぢてゐよ  
ああ彼女<sup>か</sup>も情に生きん更衣  
更衣女の誇り夜の微笑  
羅や壁後に立てる像に似て

羅や夜の灯つめたく頬を這ふ  
幕間に見る眼疲れて羅に  
香水や濡れ髪に恐怖<sup>おそ</sup>を抱く  
香水や馴れぬと云ひて性と性  
香水や恐怖なく肌なめらかに  
繪日傘や江戸の繪圖にも見ゆる街



金扇や雛妓は紅いものづくし  
繪團扇や程なく歸りを待たる  
繪團扇や孤獨の悲哀血のふるえ  
青すたれゆれ心地船心地かな  
風鈴や夜を抱擁の間において  
風鈴やうなづけは姿消えて影

風鈴や指さしちがへする血に  
風鈴に忘れ得ぬ夜の絲を繼ぐ  
夏帯や身を投げかけて細き息  
夏帯に汗止めの粉薬かな  
夏帯や疑ぐりうけて生くる世に  
夏帯や寝かせた儘の三味の掉



夏帯に挟む紅色の封筒  
麻帯やはがゆい夢を見たる晝  
氷菓子番茶のあとが淋しくて  
夏芝居女の髪かうるさくて  
甘酒や浅茅ヶ里に里なれて  
故郷を去る甘酒の甘きを避けて

蝙蝠や灯の影へ集ふ樓上に  
蝙蝠や一足も早う隠れたがる癖  
蝙蝠や赤い灯か消えて後珠がなる  
蝙蝠や寝そべつて見る接吻の本  
蝙蝠やくらやみの肌へそつとふれさう  
蝙蝠や酒におぼれて街の灯へ



うれし涙に死ぬもよし蝙蝠よ  
蝙蝠や契りあふたしなみ世の中に  
蝙蝠やふと灯を消して闇の景  
蝙蝠や明日の夜道で逢ひませう  
心中のあつた晩蝙蝠悲し  
老鶯や君に告げしも夢のやう

杜鵑梢にききてうら悲し  
杜鵑ただ茫然と手を組みて  
杜鵑障子のこまの指の跡  
杜鵑密通もあきたらぬかな  
杜鵑浮れ浴衣の妬みかな  
杜鵑遁れたる刹那の機會に



紅き夢青き夢あり子規  
時鳥闇に落しゆく夢の跡かな  
時鳥めぐる地球の上で啼く  
瞬間を尊めばよしなく子規  
連れ出して見ればあきるや時鳥  
時鳥戀のうつろの闇にゐて

時鳥呼び起すもの血と熱と  
時鳥是非とも契る晩のこと  
時鳥小さき心は石となる  
時鳥歡樂の冷めし陰影  
空想に耽ける悲哀よ啼く水鶏  
水鶏よ啼けば別れが近くなる



おもむろに石に眼覺めて翡翠かな  
翡翠やくちつけのいとあまき紙  
翡翠や肌にふれつつ灯かねむる  
翡翠や夢は黄金と血と乳と  
翡翠や指輪の Kiss の軽き微笑  
夏乙鳥忘れし夢惚ふ故郷

夏乙鳥樹蔭に眼る肌冷えて  
鮎釣や煙草のけむり雨に消ゆ  
鮎釣やふと底の琥珀の玉を  
鮎釣や鐘狂ふ森の響きを  
捨てられてゆく身そしらめ金魚かな  
合歡咲くや一息の憂き色帯びて



合歡咲くや碎けて赤きものならん  
合歡咲くや小鳥は森の智慧を知る  
合歡の花解きかねて朝なり夜なり  
花合歡や甲斐ありて腫あかるく  
葉櫻やまぼろし描く腰の石  
若葉蔭もの云はぬ石がぬれてゐる

ふるえる唇へ觸れる情の新樹かな  
落梅やそそのかされた唇の傷  
貪婪の腫してしりへに牡丹かな  
眼の光り消ゆるとき知れ散る牡丹  
緋牡丹や射せば血になる誰の名を  
天地や牡丹に怖ぢて君を撰る



肌ぬけば乳房は小さし罌粟の花  
罌粟咲くや對座する卓の割箸  
白薔薇や身のおきどころなき國にゐる  
白薔薇や永遠の戀の洞穴に  
薔薇の香や噴水の水あまき池  
睡をすへてうらみあるやう薔薇が咲く

紅薔薇や煙管をとれば氣かもめる  
紅蓮や痴情の果の旭か鈍ぶる  
白百合や妻を迎へて旅へ  
歸らばや菖蒲賣戀の一路を  
夕顔や若く見られて慕はれて  
夕顔に放逸の馴れ来る旭かな



夢の指輪



秋の夜の夢まどまらぬ愁かな  
秋の夜やふるへる唇を吸ふてやる  
秋の夜や悲しみが湧く雨の音  
逢引は氣づかれ多し残暑かな  
戀の鐘つく大空や秋涼し  
漸寒や別れ間際の閉づる音



漸寒や故ありて泣く石の上  
漸寒や東京の何處に生る  
漸寒や朝は乳より顔を見て  
鼻緒ゆるむ日比谷の樹かげ朝寒し  
朝寒や別れたる後の肌着に  
肌寒きまま別れ得し程の縁

長き夜や口紅の乱れたるあと  
長き夜のふところは極めて冷めたし  
長き夜や女はいつもあとに寝る  
夜長さに話込む粉煙草かな  
長き夜や夢の指輪に錆かつく  
長き夜やわざと眠れぬ街にゐる



長き夜や指にふれたるあたたかみ  
秋の灯や淋びしくなればかはく唇  
眼を被へば秋の灯へ塔の傾斜かな  
秋の灯やたしなみの變る酒唄  
秋の灯や遠かに胸の波を寄す  
冬近やつめたく沈づむ石の底

冬近し消えゆく靈を乗せてゆく船  
秋行けば碧く漂ふ海の影淋びし  
好色に生れなからを秋の別れかな  
秋空やもの思ふころ氣も晴れて  
消えてゆく寶石の光り秋の日に  
夕月や衾の隅もてらされて



月さすや蚊帳の浪心の浪  
天の川うなづきあふて身をそらす  
天の川心中はみななづかしこの生命いのち  
天の川渡るにやすき夜の紅い船  
秋風や人形の瞳帯の時計かな  
秋風や長き袖狭き帯かな

秋風や瀆聖の神樂歌きく  
秋風や高札は法に觸れたる  
秋風や壘は迂りて石の上  
秋風や陰の音陽の音かな  
秋風や山の鳥海の鳥かな  
秋風や一つの夢二つの夢さらに



秋の風手を額にあてて冷めたし  
稻妻や白壁光る 閻魔堂  
朝霧やある夜は過ぎて斯く記す  
朝霧や山光る 寂しき胸に  
たれもかも夢みるやうな狭霧かな  
霧立つや世をおそれ生く影の石

君よ君よ別れなば霧切れてなん  
朝霧に漂ふ海の匂ひかな  
秋の雨ふところの淋びしい時に  
秋の雨晝の坂夜の坂かな  
淋びしさの命を捨てよ露白し  
何にもものもくろみもなし光る露



焦点を趁ふよろこびや秋晴るる  
秋晴や個性か鮮かに出る  
秋晴やこの背景に抱かれて  
初汐や更けまさる無味の印象  
初汐や盃に一生を契る  
初汐や黒髪をとく手をあげて

初汐や夢朽ちし思ひに響く  
絹燈籠廊下に出れば月を呼ぶ  
秋扇とそぞろ身にしむ消息と  
忘れては君になさけの砧かな  
砧打つや追想の破懐的にて  
砧付つや黄昏の力を籠めて



砧うつや運命の七日七夜に  
寂しさや砧をうつに腫を伏せて  
小さき家の砧は夢に赤く泣く  
烈しさの戀も別れに砧かな  
ふつくりと乳房をもたげてやりぬ濁り酒  
濁り酒ほころびやすき唇の痕かな

鹿なくや人生の歩ゆみを刻む夜の音  
あかつきの甘きくちつけ隠す色鳥に  
雁なくや品川の南の波に  
雁なくや求めても枕は一つ  
雁なくや薄き影喜びの影  
雁なくや練薬を密かに紙に延して



雁なくや美しきかたちくづれて  
鴟啼くや郊外の晴れたる空に  
蝸や家あらぬ二人の呼吸  
蝸やふとみつるはかなき刹那  
蝸や夜なりせば君と逍遙  
秋蝶の日和廊下の長椅子に

秋の蚊や子供はすねて膝にねる  
虫なくや灯の氣をさけて深き森  
鳴く虫をたどりて同じ道に逢ふ  
抱いてゐて君の虫、籠の虫かな  
虫なくや生やすらかに世をたよる  
よき程に胸うたれ夢うたれ虫なけるかな



むつかゆい血の濁る夜よ虫なきあえる  
夜の蟲やふるるあえぎを血に秘めて  
夢、生温るい肌に觸れやう窓の虫  
蟻螂や沈黙を看て怒り解く  
蟻螂や踏みてひそかに影と影  
蟻螂や死する夢見て石と砂

蟻螂や森林に齡をかそへ  
蟻螂や歌の曲死の歌の曲  
蟻螂の南を指せは都會かな  
蟻螂や雑木の吾胸寂し  
蟻螂や乱滅の酒壘の口  
蟻螂やうらみを言はぬ夜の唇に



草の實や獸ふみ入るあとの荒果  
屋根の草實のれば空の青い瑠璃  
草の實や惡獸の寢息のあとに  
草の實や熟れてはおけん戀の味  
草の實や影がうつれば唯かゝる  
雜草の實るる靈は赤かりし

噫、わが骨光れ草實のれる丘に  
生命の草みのりて光れ靈あらば  
許されぬ君許されぬ桂かな  
木屢や戰慄の匂ひ強くして  
桂さくや追憶の夢にあかなく  
泣きたまへ靈の桂の花蔭に



街に逢はず桂に逢はず淋しけれ  
浄化して桂によらん自覺かな  
桂咲くや晶子の歌の指の跡  
謎一つ年経ぬ森の桂かな  
木屨や國寶の古寺の塔に  
木屨や放縦の夢暮るる日に

木屨や跫音をうれしく思ふ  
朝顔や寝卷の上に揺れる影  
朝顔や朝は淋びしき貌をして  
かくなけくいはれ聞こうぞ咲く紫苑  
咲く紫苑たかみちびきの世をわたる  
コスモスや憂鬱の髪の匂ひを胸に乱して



悲しさはこの世に生きて散る小萩  
銀杏ちるや空は悲しい日が曇る  
人間がみんな滅び果てたよ枯尾花  
曼珠沙華はしなき夢のきれぎれに  
花棕梠や潮風にさらさるる顔  
眼を拭ふ真似してありぬ棕梠の花

棕梠花や落日の隋眼に耽る  
棕梠花や見よ見よと海はゆすれて  
棕梠花や巍然と風の吹く儘に  
棕梠花や法律の及はぬ國に  
棕梠花や遊仙窟の筋を聴く  
棕梠花や蠻人は淫奔にして



倦怠の匂ひ残して棕栢の花  
棕栢花や黄金を掘る掌の汗に  
鬼灯や絲の音絶えぬ暗き街  
菊の香や迫まるも呼吸の夢のあと  
菊咲いて昔をは思はぬかよし  
白菊や一生を契のもその夜

菊の花たしなみにつれて出る街  
乳の汁母の汁葡萄かな  
櫛の實や逃れて悲し靴のあと  
妖怪の森から誘へ秋の鐘  
うれしさや洪水の街夜かあける  
爽やかに沈つむ太陽の街に住むかな



夜の街の足音



冬立つや薄き肌着の縫目より  
初冬や別れた後のおもざし  
初冬や赤い刺撃に目か澁ぶる  
冬の夜や斯くあるまでの遊び癖  
冬の夜や嘆きのほどに囚れて  
街の夢わか家に醒めて年の暮



沓脱の繼ぎ目くづれて年の暮  
黙したる人の貌見よ冬の月  
寒月や運河に船の小さき窓  
寒月や軒つき合はす路次ぬけて  
木枯や南蠻の鐘のひびきに  
不思議なることと思へは淋びし風に

木枯や沈づみゆく悲しみの底  
冬雨や音楽かふいと止む街  
夜の呼吸ひびく音よし時雨けり  
涯しなき身の愚かさや片時雨  
待つ約の橋の袂よ時雨れ來し  
雪の夜を待つ間もあらし窓の際



雪降るや停車場の汽車の屋根の上  
雪降るや丘の上より森を見て  
と説きけり更にわからぬ雪の道  
あの家とこの家通へ夜の雪  
雪の夜や十二時すぎて泊り込む  
雪の夜や堅く身を押附けて寝る

霞降る旅に旅路の物語  
鐘樓に數を忘れて小夜霞  
玉霞かすかにゆれる影と影  
小夜あられ濡手ひそかに歎くかな  
朝霜や池にのぞめる土手の石  
うつとりと冬田の道の樹にもたれ



冬田より淋しきはなし野の小家  
忘れられてあらぬあこがれ鐘氷る  
高頭巾新橋の晝を抜け出て  
うまい事儲りそうな雑子寢哉  
次の間の火鉢に寄れば不真似目に  
待つ君の來ぬを火鉢にもたれ肱

酒もなく二人は火鉢灯を避けて  
柔かき手に艶布巾火鉢かな  
吉原や明けの扉くぐる酉の市  
寒習ひふと思ふ親こころかな  
寒聲や夜の街の軽い登音  
寒聲や更けし夜の曲の印象



狼に盗まるる影に月をのこして  
水鳥や父母の戀しき歌に  
水鳥や浮島の島の鳥居に  
水鳥や酔醒なれば寢を足して  
小夜千鳥冷えきつた盃の底  
鳴く千鳥廊下の長い長ばなし

小夜千鳥千代紙の紅の鶴かな  
小夜千鳥白粉は冷めたく沈ぶむ  
小夜千鳥座りなほして貌を見る  
落葉や水郷の夢が目につく  
落葉や釣橋を渡るに馴れて  
落葉や悲しきものを夜の鳥



落葉路や道行の冷めたい草履  
落葉して南國の花の香を嗅ぐ  
落葉の悲しき石はぬれてゐる  
夕落葉旅宿兼料理屋に  
神經の刺さるる思ひ冬木立  
爪色のあまりに眞白し冬木立

冬木立解けかたき謎の繪圖かな  
冬木立「紅緑」の劇の背景  
冬木立空馬車は南をさして  
冬木立眞東にふるる煙突  
枯草や吹きはらす原近き家  
崖下の日影は淋びし草枯れて



橋朽ちて標界石に草枯れぬ  
茶の花やあと幾とせの旭を待ちて  
山茶花の影にかくれて冷えし腰  
山茶花や鼻紙捨つる裏二階  
山茶花に下駄を許さず寺の庭  
山茶花に開け放つ裏の木戸かな

山茶花や罪を身にきる可愛ゆくて  
山茶花や澁茶にさめて椽先に  
水仙や下心ある寝とまりに  
水仙やほほゑみかへす灯のかけに  
枯柳男づれこそ淋しくて  
枯蓮の西の眺めか時計台







元日やうつくしき君のこころを  
元日や歸省の郷の松と波  
元日やぬけ裏すればほろ酔ひに  
永日や暮間に晝の印象  
初日の出何れの國から明け染むる  
初空や果てもなく岸を打つ浪



船をあがれは軽い氣のりや初空に  
初空やむなぐりに滲む戀の銀泥  
春の旭によるこびつどふ鳥か來て  
初日影靜かなる湖上の船に  
初日影遁かれてあかるき窓に立つ  
年始め皆うつくしくなる世かな

年始め大陸の希望の海へ  
新曲やよみかへれ生の努力を  
彈初やおよびなきことのすべてを  
彈初めて義理詰の珠玉の生産  
數限りなき夢を漏した彈初めに  
書初の筆太に紙ちぢれたる



初芝居みかはせしその夜の匂ひ  
 縫初に裁ち方の裁ちし衣哉  
 羽子の音なづかし窓をあけてやる  
 初夢や夜明の遅い國にゐて  
 初夢やあけばのの旭射す空つ國  
 歌かるたとけかかる帯のはしかな

歌かるた重なる手なり貌と貌  
 歌かるたその事密めて身の上に  
 歌かるたほつれ毛さわるよさ程に  
 手に何にも光らぬかよし歌かるた  
 屠蘇の香やいづこでぬるる袖口に  
 初鶏か静かなる森ぬけて旭をあびる



草の實終

大正八年五月二十日印刷  
大正八年六月一日發行

非賣品

發行者兼 磯ヶ谷紫江

印刷者 宮西次郎  
東京市麹町區三番町六十九番地

印刷所 邦文舎  
東京市麹町區三番町六十九番地

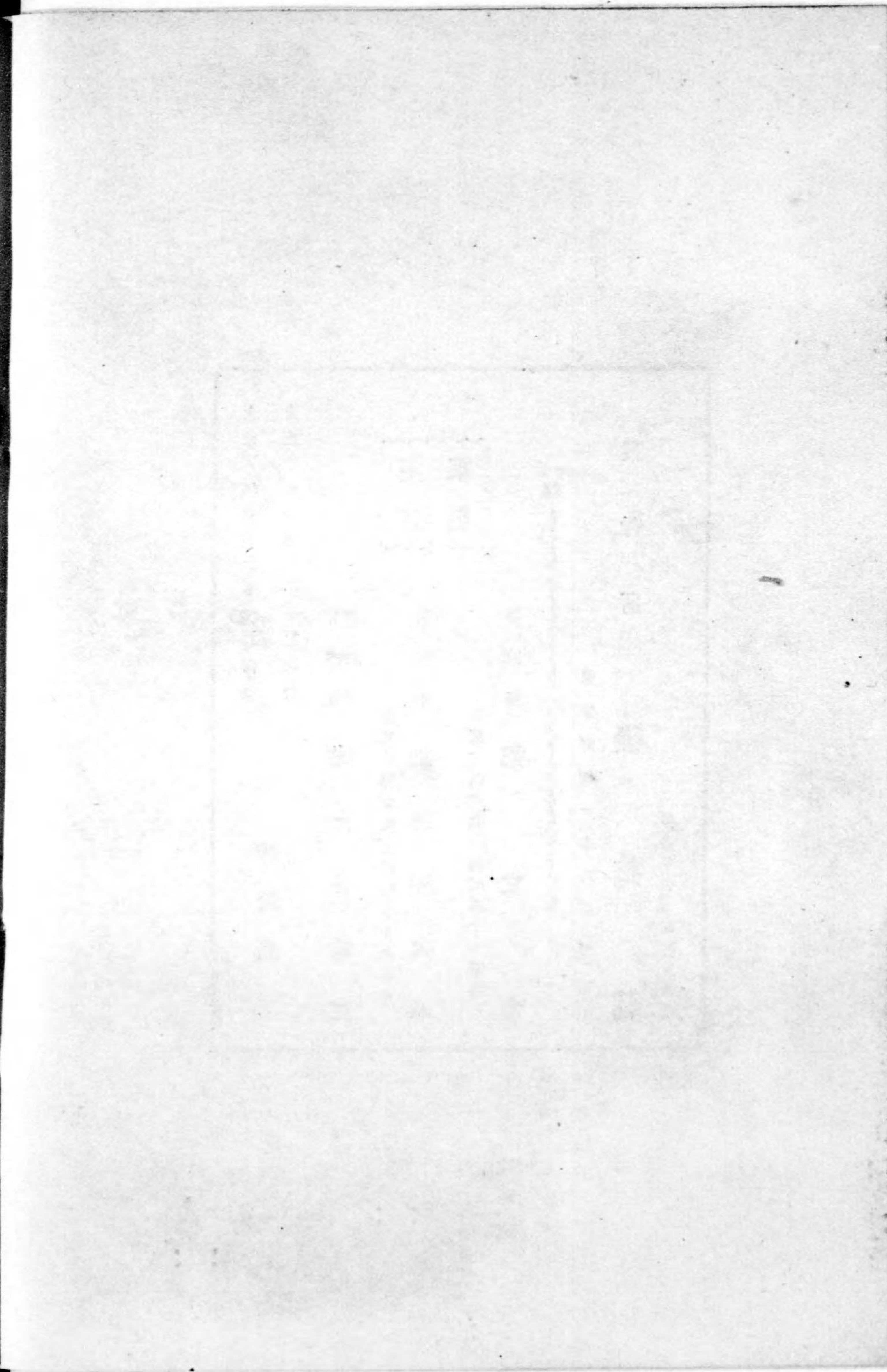
不許  
複製

東京府代々木四三〇

發行所 後苑莊

振替東京三五四五四番







281  
140



終

